

特集

アストロノミー・パブ、星のソムリエ

そして科学プロデューサの養成へ

～三鷹ネットワーク大学とは何か？～

大朝 摂子（NPO 法人三鷹ネットワーク大学推進機構事務局次長）

1. はじめに

NPO 法人三鷹ネットワーク大学推進機構（以下「三鷹ネットワーク大学」と略。）は、国立天文台や国際基督教大学をはじめとする15の教育・研究機関と三鷹市がNPO法人を設立して運営する「新しい地域の大学」であり「民学産公」協働の取り組みである。

2009年度の実績では、1年間で148件591コマ（1コマは1.5h）の講座等を企画・実施し、延11,000人を超える人々が参加している。受講者アンケートによる講座の満足度は平均で85%。2010年3月末現在で約4,600人の登録受講者は、20代以下13.1% 30代18.2% 40代20.4% 50代15.3% 60代15.8% 70歳以上10.0%（無回答1.9%）と、各年齢層にバランスがとれた年齢構成となっていることに特徴がある。

受講者登録時に、関心がある分野についてアンケートを行っているが、約28%が「天文学」を選択している。また、上記148件591コマのうち、61件（約41.2%）・92コマ（約15.6%）が天文学や数学、物理学や生物学などのサイエンス系講座である。特に、国立天文台と協力して開催している「アストロノミー・パブ」や「星のソムリエみたか・星空案内人養成講座」など、市民と研究者が関わりを持ちながら展開する講座は、市民人財[1]育成のための、新たな形式の学びである。

本稿では三鷹ネットワーク大学での5年間の取り組みの中から、特に「アストロノミー・

パブ」「星のソムリエみたか・星空案内人養成講座」、そして「科学プロデューサ」の養成について取り上げ、「人財育成」を通じて三鷹ネットワーク大がめざすものを明らかにしたい。

2. 「アストロノミー・パブ」とは？

アストロノミー・パブは、三鷹ネットワーク大学の「交流スペース」で、8月を除く毎月第3土曜日の夕方から開催される、天文に特化した「サイエンス・カフェ」である。三鷹ネットワーク大学オープン時から継続的に開催している。前半1時間は「トーク」の時間として、ホスト・ゲストが天文学に関する話題について語り合う。後半1時間の「パブタイム」では、立食パーティー形式で参加者と講師が直接対話を楽しむが、1人で講師を5分以上独占しないことが「ルール」として共有されている。アストロノミー・パブの中心はこの「パブタイム」であり、「トーク」は話題のきっかけづくりの時間。その日の話題にちなんだ名前をつけた美味しい食事（和食とイタリアンの隔月ケイタリング）、お酒を含む飲み物とともに、研究者と市民の直接対話で「科学」を楽しむ場として定着し、ほぼ毎回抽選で参加者を決めている人気企画である。

2.1 アストロノミー・パブの特異性

アストロノミー・パブは三鷹ネットワーク大学の数ある講座の中でも、かなり特異な存在である。開設以来継続しているという点は

もとより、お酒を含む飲み物や本格的な料理が供されること、二重の「対話」が組み込まれたプログラム、そして「店主」の存在も重要な要素である。

科学を市民に伝える手法の1つとしての「サイエンス・カフェ」は、他にも多くの事例があるが、おそらく、三鷹ネットワーク大学で開催するものほど「飲食」に注力している例は少ないのでは、と思う。

また、話題の提供としてその日のテーマが対談で語られることと、「パブタイム」での参加者どうしの対話という、「二重の対話」で場が進行することもユニークな点かもしれない。

アストロノミー・パブの「店主」は国立天文台の縣秀彦准教授である。縣さんは国立天文台天文情報センターの普及室長としても有名だが、三鷹ネットワーク大学にとってはアストロノミー・パブの発案者であり、本稿で紹介する「星のソムリエみたか」や「科学プロデューサ」の仕掛け人でもある。

2010年4月に50回目を迎えたアストロノミー・パブはそもそも、2005年5月に縣さんから「企画書兼メニュー案」がメールで送られてきたことに端を発している。

2.2 熱烈なリピーターの存在

アストロノミー・パブが三鷹ネットワーク大学の事業として定着する中で、毎月の「パブ」を楽しみにしてくれる熱烈なリピーターがいることもまた、アストロノミー・パブの特異な点かもしれない。ご自分たちを「アスメン」（「アストロノミー・パブメンバー」の略）と呼ぶ参加者の皆さんは、ここでなければ出会わない人々であり、異年齢集団でもある。リピーターであるアスメンの皆さんの存在が、初対面の市民どうしの会話をスムーズにしている。参加者による自主的な2次会が定例化し、掲示板で情報交換を継続している。縣店主の言葉によれば「ひとりぼっち

の天文ファンが連結した」ということだろう。

2.3 手法としての「サイエンス・カフェ」

アストロノミー・パブでの経験をもとに、三鷹ネットワーク大学では「サイエンス・カフェ」形式での様々な実績を積んできた。国際基督教大学の寄付サロン「サイエンス・リテラシー・カフェ」や、市内の飲食店に場所を移した「街中サイエンス・カフェ」、賛助会員のNPO法人くらしとバイオプラザ21提供の「草の根バイオカフェ」など、講座とは異なる形式で一般市民と科学者が出会い、直接対話する場を生み出している。

三鷹ネットワーク大学が「サイエンス・カフェ」形式の「サロン」を続ける目的は、研究者と市民が対等に会話する場を提供することにある。研究者は市民に専門性の高い研究成果を語る。直接対話で伝えられる最先端科学の成果は、論文や講演会とはまた異なった趣旨で市民に伝えられて行くが、一方で、この「サロン」の場の大きな特徴は情報の双方向性にある。市民もまた、必ず何かの「専門家」であるため、講師である科学者は対話の中から、異なる専門性によって市民から発せられる情報を直接受け取ることになる。

アストロノミー・パブは、このような「共有の場」としての「サイエンス・カフェ」の手法を三鷹ネットワーク大学に、ひいては三鷹のまちにもたらすきっかけとなったと言えるだろう。

3 星のソムリエみたか・星空案内人®の養成

「星空案内人®」は「星のソムリエ®」という愛称でも呼ばれ、山形大学とNPO法人小さな天文学者の会から発信された、市民人財育成のプログラムである。「星空案内人資格認定制度」は、現在は、山形や三鷹を含む全国14か所で開催されている。三鷹では平成19年度から養成を開始し、平成21年度末で星空案内人13人、星空準案内人107人の、計

120人が資格を取得している。

なお、「星空案内人」「星のソムリエ」等は山形大学の登録商標である。星空を語る市民ボランティアを養成するためのこの制度は、名称が非常に魅力的であることから、本来の目的に沿わない商用利用等を防ぐために、敢えて商標登録を行ったことを付け加える。

3.1 三鷹での養成状況

三鷹では、三鷹ネットワーク大学が星のソムリエ養成を担う運営団体として、「星空案内人養成講座運営委員会」に登録している。初年度は「国立天文台企画講座」としてスタートしたが、諸般の都合により現在は、国立天文台から一部の講師や会場提供の協力を得つつ、三鷹ネットワーク大学が主体的に人財育成を行う、という形式をとっている。平成19年～21年度までの養成状況は表1のとおり。

表1 三鷹での養成状況

年	応募者数	受講者数	準ソムリエ	ソムリエ
H19	174人	20人	7人	13人
H20	163人	70人	51人	
H20	167人	53人	49人	
計	504人	143人	107人	13人

また、3年間で延500人以上に上る応募者の属性については、表2のとおりである。

3.2 「星のソムリエ」養成を始めた理由

「星のソムリエ」がスタートした平成19年度は、三鷹ネットワーク大学にとって様々な変化があった年だったと言えるだろう。

国立天文台から、科学技術振興調整費「地域再生人財創出拠点の形成」に申請するため、連携自治体として地元の三鷹市に、また、実際に協力体制を組む組織として三鷹ネットワーク大学に協力要請があったのは平成19年

2月。その時点では、次項で述べる「科学プロデューサ」等の養成等に関するプログラムの青写真が存在するだけ、という状況だった。

表2 星のソムリエ養成講座申込人数比較

年	H19	H20	H21
受講定員	20人	70人	53人
申込者数	174人	163人	167人
男性	93人	85人	80人
女性	81人	83人	87人
10代	11人	5人	4人
20代	27人	26人	36人
30代	46人	53人	55人
40代	34人	28人	41人
50代	29人	29人	22人
60代	22人	17人	8人
70代	5人	9人	1人
80代	0人	1人	0人
三鷹市内	43人	50人	36人
市外	131人	118人	131人

上記の連携自治体は「地域再生計画」を策定して内閣府に提出することが国の制度として求められている。三鷹市は国立天文台の振興調整費申請を支えるために、新たに「地域再生計画」を策定したが、その中で、地域再生を進める市民人財として、天文台が養成する「宇宙映像クリエイター」「科学プロデューサ」と両輪を成す、「ボランティア性の高い市民人財」の育成が必要だと考えた。「科学を文化にする」活動がまちづくりの中でのムーブメントとなるには、「クリエイター」や「プロデューサ」だけではなく、より幅広く活動する市民人財が必要だと考えたからである。

三鷹ネットワーク大学は、三鷹市のシンクタンク機能を担う立場にもあることから、「天文台のあるまち・三鷹」を推し進める要素の

1つとして、国立天文台が天文学をベースにして創出する「科学文化」の醸成を支援し、これらの要素を地域社会の側から支える市民人財として、「星空案内人」の養成に着手することになった。

3.3 「星のソムリエ」の特異性

「星のソムリエ」の創始者である、山形大学の柴田晋平教授は、「星空案内人」の活動を「Happy 2乗の法則」と呼んでおられる。

これは、案内人が「自ら星を学ぶことの喜び」と、星空について自らが学んだ内容を隣人に語ることで「喜んでもらえる」喜び、の2度「Happy」なことがあるから、という意味であり、全国に徐々に広がるソムリエの活動を表す、的確な言葉である。

「ソムリエ」は「ボランティア性の高い市民人財」だと前項で述べたが、星空案内人の活動の基本は、「市民が市民に星空を語る」ことにあるとも言えるだろう。「Happy 2乗の法則」についてももう少し詳しく考えてみると、「ソムリエ」が星を学ぶことには、市民が正しい科学的知識や手法を学ぶことに重要性がある。また、その「ソムリエ」が星を語ることには、市民同士の会話の中から、一般市民に親しみやすく身近な立場から語ること、の重要性が含まれているのではないだろうか。

三鷹のような、国立天文台の所在地という好立地条件をしてもなお、専門家による「アウトリーチ」活動には主に量的な限界がある。

ソムリエの養成が3期目を迎え、1期生・2期生の活動が活発化してきた平成21年度では、9月以降の半年間で、三鷹ネットワーク大学が関わって開催した三鷹市内の小中学校等での観望会だけで15回、約1000人が参加した。また、授業支援等でソムリエが学校の授業に出向いて活動した回数は7回で、小学校4年生～6年生を中心に延べ約1500人の実績となった。天文学を市民に伝えるための

優れた手法としての「星空案内人」の活動が、地域社会の中で実り始めている一例だと言えるだろう。

4. 「科学プロデューサ」の養成

前項で述べたとおり、国立天文台と三鷹市は、平成19年度に科学技術振興調整費「地域再生人財創出拠点の形成」に「宇宙映像利用による科学文化形成ユニット」（以下「科学文化形成ユニット」と略。）として申請して採択された。同時に、三鷹市は地域再生計画「科学技術と科学文化でまちづくり・ひとづくりプロジェクト」を内閣府に提出しており、三鷹市側の受け皿として、また三鷹市内外の関係者をつなぐハブ機能として、三鷹ネットワーク大学が機能を果たすことになった。

「科学文化形成ユニット」は平成19年～23年度までの5年間のプロジェクトだが、平成21年度に実施された中間評価でも地域社会との密接な連携が評価され、全国的にも数少ない評価Aを取得し、5年間を通じたプロジェクト運営が認められたところである。

4.1 クリエータ・プロデューサの養成状況

「科学文化形成ユニット」での「宇宙映像クリエイター」「科学プロデューサ」養成については、平成21年度末までの実績は表3のとおりである。

「科学文化形成ユニット」で養成される人財は、「宇宙映像クリエイター」と「科学プロデューサ」の2種類がある。このうちの「科学プロデューサ養成コース」は主に、宇宙映像に関する様々なニーズに対応し、実際に契約や導入支援等を含めた営業要員としての活動が可能になることを習得すべきスキルとして設定している。科学プロデューサとしての基礎知識を習得する「科学プロデューサ入門」と、営業や起業の基礎を学ぶ「SOHO 起業講座」の両講座を約17週間にわたって履修し、ビジ

ネスプランの作成や実習が課せられる、半年間のプログラムである。

表3 科学文化形成ユニット修了生実績等

人財養成の カテゴリー	養成修了者 数(3年目)	5年間の 目標
科学映像ク リエータ	18人	36人
科学プロデ ューサ	45人	72人
合計	63人	108人

4.2 「科学のお祭り」が街へ！

三鷹市を中心とした地域では、科学プロデューサの活動機会を確保するために、国立天文台等が主体となって開催している「東京国際科学フェスティバル」や、同フェスティバルに協力して三鷹市と三鷹ネットワーク大学が主催している「三鷹の森 科学文化祭」等の取り組みが、世界天文年でもあった昨年度からスタートしている。

「三鷹の森 科学文化祭」のメインイベント「みたか太陽系ウォーク」は、三鷹市の地図に13億分の1に縮尺した太陽系の軌道図を乗せたマップを使い、商店会等の協力のもと、各惑星等のエリアに分かれた店舗をめぐりながら、太陽系の大きさを実感するスタンプラリーである。このイベントの企画やマップ等の制作には、複数の科学プロデューサコース修了生が関わり、地域ニーズにあわせた科学文化の醸成に一役買っている。

4.3 なぜ「科学プロデューサ」養成か？

三鷹市自治基本条例では市民の定義を「市内に住み、又は市内で働き、学び、若しくは活動する人」としている。

地域再生計画での人財育成で養成された「科学プロデューサ」には、養成修了後も「在

活市民」として、三鷹市に深く関わって活動することが望まれている。地域社会と一般市民が「科学文化形成ユニット」修了生に求める要素は、科学を正しく理解しているだけではなく、わかりやすく伝えることができる人財であり、自分たちが活動するだけでなく市民や地域の産業界の活動を支えることができる人財であり、科学を「専門家のため」だけではなく「市民／地域社会のため」のものにできる人財である。

「科学プロデューサ」は、科学を文化にする活動の中で、ボランティア性の高い「星のソムリエ」などの多彩な市民人財と協働しつつ、事業の継続的な運営を図るために、コミュニティ・ビジネスを立ち上げるための人財として養成されている。これは、継続的に起業講座を開催してきた三鷹ネットワーク大学での実績や、起業支援策が充実している三鷹市だからこそ、連携できる内容だとも言えるだろう。

科学プロデューサコース修了生たちの活動はまだ芽吹いたばかりだが、三鷹という土壌にしっかり根を下ろし、花を咲かせる活動へと育ってもらいたいと願っている。

注 釈

[1]三鷹市では、人は宝であるという意味を込めて、「人材」の「材」について「財」の字をあて、「人財」と表記することが多い。本稿でも、「財」の字を採用することをご了承いただきたい。

[2]三鷹ネットワーク大学ホームページ
<http://www.mitaka-univ.org/>